

花のお江戸を歩く

「国会議事堂参観～旧江戸城散歩」

2013年2月10日（日）

国会議事堂は「国産石材の標本箱、博物館」といわれるほど、日本で産出される石材を多用しています。設計や加工ももちろん国内で行い、その歴史的・文化的価値は極めて高く、貴重な文化財です。今日はゆっくりと議事堂の素晴らしさを堪能しましょう。

旧江戸城は東京ドームの約22倍の広さで、現在は、本丸跡や天守閣跡、二の丸公園のある東御苑と西の丸(将軍が退位し大御所の居所)を中心とした天皇家が暮らす皇居に分かれています。今日は、日本の中心地で、江戸時代から現代まで、激動する日本の政治を写し続けてきた国会議事堂～旧江戸城内堀沿いをゆっくり散歩します。

1◆国会議事堂◆

国会の衛視さんが50分間丁寧にガイドしてくれます。

2◆桜田門◆

昔はこの付近に桜が多かったので、桜田門といわれるようになった。元々この門は小田原街道の始点として「小田原口」と呼ばれていましたが、江戸時代の寛永13年(1636)に、日比谷入り江を埋め立てて桜田門として作り直されたようです。大正12年の関東大震災で一部破損し、改修されたため江戸時代と少し変わっています。昭和36年に国の重要文化財に指定され、皇居のなかでも最も美しい門ではないかと思えます、昔は門前に木橋があった。

この桜田門外に水戸の浪士達は集まり、松平大隅守屋敷の堀ぞいと濠端とのそれぞれの持ち場つき、大老井伊直弼が登城するのを待ち受けて、安政7年(1860)、井伊大老が水戸薩摩浪士の手にかかって暗殺されたのが、この門外で、俗に「桜田門外事変」である。【国:重要文化財】

3◆二重橋◆

『二重橋』の名称については、「皇居前広場から眺めると手前と奥に二つの橋が見えるところから二重橋と呼ばれる」とか、「手前のアーチ橋が2連アーチなので二重橋と呼ぶ」とか聞かされることが多いが、実はいずれも誤りで、正しくは奥に架けられた鉄橋の名称が『二重橋』なのである。ではなぜこの奥の橋を『二重橋』と呼ぶのだろうか。

奥の橋は江戸時代には『西丸下乗橋(にしのみる げじょうばし)』と呼ばれており、その名の通り、登城の大名らがこの橋の手前で馬や駕籠から降りる場所であった。これに対して手前の橋は、当時『西丸大手橋(にしのみる おおてばし)』と呼ばれた。この二つ橋が造られたのは、江戸城に天守閣がそびえていた二代将軍秀忠の時代で、慶長15年から16年(1610～1611)にかけて、西丸改修工事が行われた際に建造されたものだ。その際、奥の『二重橋』は深く切り込んだ濠に架けられたため、石垣の下部を濠の両側からせり出させて、そこにいったん橋桁を渡し、その橋桁の上に支柱を立てて橋全体を組み上げた、いわゆる二段造りの構造とした。『二重橋』の通り名は、実はこの構造と姿から付けられたものである。江戸時代は木造だったために、橋の強度を増す必要からこの構造となったのだが、その木橋も明治21年(1888年)には鉄橋として現在のような橋に架け替えられ、また同時期に手前の木橋も石橋へと姿を変えて、今眺める風景とほぼ同じものとなった。

4◆楠正成像◆

明治23年(1890)年、伊予国(愛媛県)別子銅山の開坑200年を記念し、時の住友家当主、友忠が、皇室に対する忠臣としてその名を知られた楠正成の銅像を、自らが経営する別子銅山の銅を用いて铸造し、宮内省(現、宮内庁)に献納することを志しました。

残念ながら友忠は銅像の完成を見ることなく、若くして亡くなりましたが、その遺志を継いで銅像を献納したのが、記文に名を残す住友吉左衛門です。

銅像の制作を依頼された東京美術学校(現、東京藝術大学)では、当時木彫科の主任教授であった高村光雲(「智恵子抄」などで知られる詩人、高村光太郎の父)をはじめ、複数の教授および学生が制作にたずさわり、6年後の明治29(1896)年に完成しました。

尚、この像の正面には記文がはめ込まれている側になりますが、像の顔は正面とは反対側の皇居側を向いています。これは、皇居に対して顔を背けるのは失礼にあたるという理由によるもので、像の正面から見て顔が反対側を向いているという珍しい作りの銅像でもあります。

5◆坂下門◆

老中安藤信正は、公武合体運動を推進して、皇女和宮を14代将軍家茂の夫人に迎えることに成功した。これに憤激した尊攘派 水戸浪士は文久二年(1862)1月、午前8時頃、坂下門前の屋敷から登城途中にあった安藤信正を襲撃した。傷ついた信正は、坂下門内に逃げ込んで一命を取り留めた。世に言う坂下門外の変である。

坂下門外の変は、桜田門外の変同様、水戸浪士の手によって実行された。桜田門外の変では、大老井伊直弼の首級を挙げたのに対し、坂下門外の変では討ち損じている。計画はどちらかという疎漏。時勢に対する感覚という意味でも、この時点で安藤信正を討つのにどれほどの意義があったか疑問である。桜田事変の「二番煎じ」という印象を拭えない。

6◆桜田櫓・巽櫓◆(さくらだやぐら・たつみやぐら)

桜田櫓とも巽櫓ともいわれる。江戸城に残る唯一の隅櫓で、その姿は美しく濠に映えている。櫓の中には有事に備えて、鉄砲・弓・長柄・持筒などが保管されていたという。

白亜漆喰総塗込めで横に二条の線があり、出窓状の突き出しが石落として、弓や鉄砲を撃つ狭間を持っている。

江戸城にはこのような二重または三重の櫓が20基もあったが、今では富士見櫓・伏見櫓の三基が残っているだけである。

皇居参観や観光で訪れる人に最初に目に入るのがこの桜田櫓であろう、お城のシンボルといえは櫓である、江戸城中の櫓では小さい方である、二重橋と大手門の間にあるこの櫓は一番目立つところに位置している。菊のご紋が権力闘争の歴史を忍ばせている。

7◆桔梗門(ききょうもん)◆

かつては内桜田門と言っていた。この門は二の丸、三の丸に入る南門で、幕府の要職者が登下乗する門であり、大門六門の一つとして厳重に警備され、門外に下馬札があった。石垣が御影石で出来ていて立派なことが分かります。

道灌時代の泊船亭はこの辺りだったといわれている。道灌の桔梗紋が屋根瓦に残っていたので桔梗門と名前になったという説や、船で各大名がここから帰郷したので「帰郷」が「桔梗」になったという説、どれが本当なのか定かではない。

現在は、宮内庁の関係者や皇居参観の時の入り口、またこの奥に皇宮警察本部がありその関係者の出入り門になっている。

8◆大手門◆

旧江戸城の正門。諸大名はこの門から登城した。かつて門前には大手門橋がかけられていたが、大正年間に埋め立てられた。

高麗門を入ると、四角に囲われた枳形と呼ばれる広場があり、右奥に重厚な渡櫓門がある。高い渡櫓門と枳形の構造は安土桃山時代になって発達した城門の型式である。

枳形には、城の内側に構えた内枳形と外側に構えた外枳形があり、大手門は外枳形である。このような右折枳形門としたのは、攻め込んできた敵を陥れる罠である。

高麗門を破って敵軍が枳形に侵入しても、渡櫓門をしっかりと閉じてしまえば敵は行き場を失う。そうとは知らない軍勢が後から押しかけると、先頭の敵軍は大混乱し、そこを渡櫓や石垣の上から狙い撃ちするという仕組みである。

江戸城大手門を外柵形としたのは、東北の雄伊達政宗らで、政宗は自ら大手門の工事を買って出たといわれる。大手門の警固は、十万石以上の譜代大名が受け持ち、『徳川盛世録巻之二』によると、鉄砲30丁、弓10張、持弓2組、持筒2丁、長柄槍20筋が常備されていた。また、初期の江戸城大手門は、本丸のすぐ下(現在の同心番所のあたり)にあり、警固は甲賀者がしていたといわれる。

9◆三の丸尚蔵館◆

三の丸尚蔵館は、昭和天皇陛下と香淳皇后陛下が代々皇室に受け継がれてきた、絵画、書、工芸品などの美術品類6,000点余を国にご寄付されたのを機に、これらの美術品を大切に保管管理するとともに、調査、研究を行い、展示により一般公開することなどを目的として平成四年(1992)に建設された。

なお、平成八年(1996)、故秩父宮妃から寄贈された美術品のうち900点余が、新たに収蔵品として加えられている。さらに平成13年には香淳皇后のご遺品が国に寄贈されたのを受けて、現在は約8千点の作品を収蔵しています。平成5年11月3日から行事等に支障のない限り一般に展示公開されています。

10◆同心番所◆

大手三の丸(大手下乗門)を警固する与力、同心が詰めていた。ここを駕籠や馬に乗ったまま通ることが出来るのは、尾張、紀伊、水戸の御三家だけで、それ以外の大名は駕籠や馬から降ろされ、検問をうけた。お共はここで主人の帰りを待っていて、いろんな情報の交換もしていたという。このことは「下馬評」の原語になった。

同心とは、江戸幕府の諸奉行・所司代・城代・大番頭などの下にあつて、庶務・警備の仕事をしてきた下級役人の総称である。身分は御家人で、形式上は一代限りの勤務だった。

番所の屋根瓦の一番高い所に徳川家の「葵御紋」の妻瓦、一番手前の軒端の瓦に天皇家「菊御紋」があり、歴史の変遷を物語っている。軒先は普通の「三巴紋」のかわらである。

11◆百人番所◆

大手三の門の上の護り。江戸城本丸御殿の最後の固めで、最大の検問所として睨みを利かせていた。鉄砲百人組と呼ばれた根来組、伊賀組、甲賀組、二十五騎馬の四組が交代で詰めていた。各組とも与力20人、同心100人が配属され、昼夜を問わず警固に当たっていた。

南北50メートルほどの長大な番所の建物の屋根瓦は、昭和三十年代に修復されたが、それ以前はヒメムカシヨモビなどが生え、それなりの風情があったといわれる。

番所の前は、むき出しの石垣が連なって石の殿堂の趣きだが、昔は櫓や多門がびっしりと建ち並んでいたの、いま見る風景よりも、はるかに威圧感があったと思われる。

12◆大手中之門跡◆

江戸城へ登城するには、大手門、大手三之門、大手中之門、書院門(中雀門)の四つの門を通らなければならなかった。大手中之門は三番目の門であり、門前に百人番所、門内には大番所があつて警備は特に注意を払われたという。石垣の大きさも見てもその重大さが分かる。

元禄十六年の大地震で被害を受け、大掛かりな修復も行われている。門は明治政府によって撤廃されてしまった。

その後も数回の地震などで石垣のずれが出てきたため、現在は修復工事が行われている。修復工事中に石垣の裏に刻銘などが刻まれた石垣もあり、元禄十六年にこの門を修復した大名の刻印も見つかっている。

13◆大番所◆

「番所」とは、警備の詰所のこと、百人番所、同心番所、とこの大番所の三つがのこっている。大手中之門の内側に設けられ、他の番所よりも位の高い与力・同心によって警備されていた。江戸城本丸へは最後の番所であつた。

この番所は当時のままで保存されている。大名や旗本であってもここからは乗り物から降りて歩

いて登城しなければならなかった。ここからは上り坂道になり坂の途中で最後の門で書院門(中雀門)がある。

14◆書院門(中雀門)◆

別名:中雀門ともいわれていた。左上の石垣には重箱櫓と書院二重櫓があり、本丸に上がる人びとを圧倒した。昔は坂下に二の門があり、現在はスロープになっている坂道は石の階段であった。上り坂を囲む石垣は見事すぎるほどの切石積みとなっている。

坂を右に曲がると中雀門跡がある。足下には3対の門柱の石があり、それぞれの石には丸と角の二つの穴がある。

両側の石垣はボロボロで、稲妻状の裂け目、円形の割れ目、あるいは人面に変形し、しかも真っ黒に焼けている。文久三年(1863)、本丸御殿が焼けたときに類焼した痕と考えられ、150年近く経過した今も火災の凄まじさを物語っている。本丸地区は五回の羅災にあい、そのつど復旧されたが、文久三年の火災以降は再建されなかった。

15◆富士見櫓◆

富士見櫓は、江戸城本丸では現存する随一の櫓で、遺構の中では最も古いものに建築され、関東大震災で倒壊、大破したが、その後、主要部材に旧来の材料を用いて再建されている。

総白漆喰の大壁・長押型を二条に塗りだし、石垣と濠に面した外壁の中央に「張出」をつけ、「石落とし」を兼ねた三重櫓は、どこから見ても同じに見えることから「八方正面の櫓」と呼ばれる立派なものである。

それ故、焼失した天守閣の再建が断念された後、天守閣の代わりとして使用されたこともある。富士見櫓は柵で隔てられているが、櫓の向こうの空は広く、ビル群も見えず、高い所にあるのが伝わってくる。

富士見櫓の石垣は「切り込みハギ」で高く積み上げてある。富士見多門の下や北桔橋門あたりなど、江戸城には高い石垣が多い。石垣と濠は城の生命線である。

16◆松の廊下◆

本丸御殿大広間から白書院に通ずる「松の廊下」があった、今は標石だけが残っている。

元禄十四年(1701)浅野内匠頭長矩が吉良上野介に刃傷事件をおこしたところで、この事件は、豊島刑部少輔(信満)が寛永五年(1628)八月、老中井上主計頭(正就)を切ったのと、佐野善左衛門が天明四年(1784)三月、若年寄田沼意知を刺した事件とともに、江戸城三大刃傷事件のひとつに数えられている。

松の廊下は畳廊下で本丸の東南に位置し、本丸で二番目に長い廊下といわれ、西へ約19メートル、北へ約31メートル、幅は約5メートルであったと伝えられている。

障壁画に「松」を主題にした絵が描かれていたことから「松の大廊下」と呼ばれ、後の弘化頃の本丸御殿では、松に群れ飛ぶ千鳥の障壁画が、大廊下を飾っていた。

江戸城本丸で起きた刃傷事件は10件に及ぶと言われている。事件を起こした者は全て切腹している。→ドンの大砲→休憩

17◆石室◆富士見多門の北側に、蓮池濠を背にした立ち木の陰のひっそりしたところに石室がある。江戸城の遺構の中では比較的小さなもので、表の石組には焼けたような痕があり、多少ずれている。入り口には扉を取り付けた穴がある。暗い内部は20坪方メートルほどの広さがあり、伊豆半島産の安山岩(伊豆石)の切石で、隙間もないほどキッチリと壁が造られている。

江戸城の抜け穴とか、御金蔵という説もあるが、大奥御主殿、御納戸の脇という場所柄から、非常時の大奥の調度品や文書類など、貴重品を納めた富士見御宝蔵の跡と考えられる。

18◆大奥◆

徳川将軍家の夫人の居住区。大奥は徳川将軍家に限って用いられていた。江戸城本丸、西の丸、二の丸に、それぞれ大奥とよばれる区画があり、いずれも各御殿の北側に設けられていたのので「北御殿」とよばれていた。本丸の御殿の建坪は1万1373坪で、そのうち大奥は6318坪を占

めていた(1845)が、1863年(文久3)の焼失後は再建されなかった。西の丸の大奥は758坪4合であった(1864)。

大奥の管理事務所として「御広敷(おひろしき)」が付属していて、そこには男の役人が勤務した。中奥と大奥との間は銅塀で仕切られており、1か所あるいは2か所の「御錠口(おじょうぐち)」が通じているだけである。そこを通過して大奥に入れる男性は将軍だけであり、御広敷の役人も通れなかった。

19◆天守閣跡◆

寛永十五年(1638)三代将軍家光のとき、元和の天守台(南部藩・津軽藩構築)に金の鯨を載せた、高さ51メートル、五層の天守閣に立て替えられた。

明暦3年(1657)の大火で天守閣が焼失した翌年、加賀前田藩によって築き直された土台。それまでの天守台より一間(約1.8メートル)低い高さの18メートル、花崗岩でできている。ところで、天守台ができ上がったところで、天守閣建設は延期され、その後再建されることはなかった。

幕府の重臣で四代将軍家綱の叔父にあたる保科正之が戦国の世の象徴ともいえる天守閣はもはや時代遅れ、物見のためだけしか用をなさず、むしろそれより城下の復興を優先させるべきと提言したもので、江戸城に蓄えられていた金銀は大名屋敷の移転や広小路の城下の復興につかわれたという。

20◆北桔橋門◆

この辺りは、大田道灌時代、城の大手であったといわれる。江戸城には橋を桔ねげて本丸への通行を完全に絶つ桔橋が二つある。一つは、この北桔橋であり、もう一つは本丸と吹上方面をつなぐ西桔橋である。

北桔橋門は復元され、いまに残るのは高麗門だけで、渡櫓門、多門はないが、かつては渡櫓門と岩岐多門、乾二重櫓に囲まれた、L字型のいかめしい内枳形だった。橋が懸け橋ともいわれた桔橋の下は深く削られている。大奥に近い重要地点だったので、石垣は堅固、雄大で高く、濠は深く、見事な眺めである。

21◆梅林坂◆

皇居東御苑の梅の名所といえば「梅林坂」。文明10年(1478)太田道灌が菅原道真を祀り、梅樹数百株を植えたのでこの名があるといわれています。現在も梅林坂の下から本丸方面にかけて50本ほどの梅があります。この梅の木は多くは昭和42年に植えられたものだそうです。早咲きの品種は12月の冬至のころから咲き始め、例年2月中旬に見頃を迎えます。

22◆平川門◆この門は江戸城の鬼門にあることから、不浄門とも呼ばれ城内の死者や罪人を出す特殊な門となっていた所だ。さらにこの門は大奥女中の通用門でもあったことから、女性は不浄のものとされていたことが伺える。元禄14年、吉良上野介に刃傷に及んだ浅野内匠頭はここから出されて切腹、大奥の江島も信州高遠に流刑となった際に、この門から出された。この門の逸話としてはあの春日局(かすがのつぼね)が門限に遅れて、入ることができず、門前で一夜を明かしたということもあったようだ。→時間見て二に丸庭園を散策

お帰りはメロ大手町又はJR東京駅